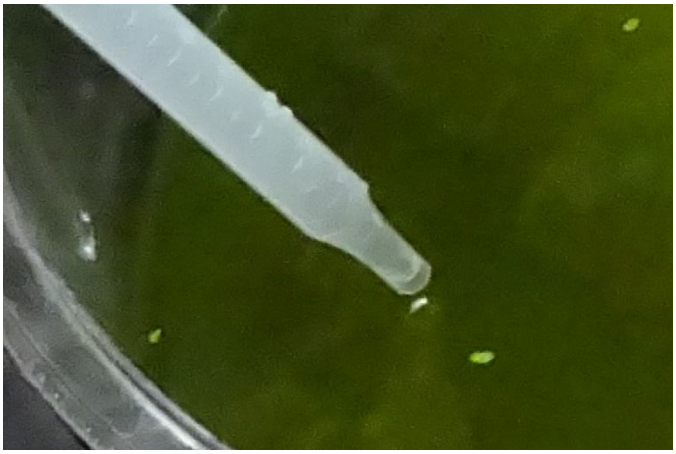
「日々の理科」（第 1829 号） 2019,-7,12

「メダカの卵と稚魚をもらう（４）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

メダカの稚魚を扱うには、スポイトを使う。普通のスポイトでは吸引力（短時間で吸い取れる水の量）が小さいので、私はプラスチックスポイトの先端を切ったものを使わせている。



これだと、狙った「水域」の水を吸い取れば、ほぼ確実にメダカの稚魚が入る。メダカは群れになって泳ぐこともあるので、うまくすると、１回で数匹の稚魚が入ることもある。

時々「稚魚採り」が、天才的に上手な子どもがいる。何か独特の勘を働かせていて、こういう子どもが水から出したスポイトには、必ず稚魚が入っている。私はそういう子どもの様子を観察してみた。泳ぐ稚魚をスポイトで追いかけるのではなく、スポイトの位置を決めて、その近くに来た稚魚を捕えているとわかった。逆に、何度試しても１匹も採れない子どももいるので、上手な子どもの存在には大変救われた。

稚魚も卵も「在庫切れ」になると、今度はタニシを採りだした。教科書に「タニシやモノアラガイを水槽に入れておくと、水槽のゴミを食べてくれる」と書いてあるのだ。最後は「タニシの争奪戦」になっていた。

40 分ほど大騒ぎをしながら活動をして、ほぼ全員の容器に、卵２個以上、稚魚２匹を入れることができた。子どもたちは、うれしそうに「かわいい！」「ちっちゃ！」と自分が飼うことになったメダカと卵を観察していた。

【子どものノートから】
「今日は、教室でかっていたメダカがうんだたまごと、ち魚をもらいました。わたしは、たまごは自分でとれたけど、ち魚はムリだったので、〇〇さんにとってもらいました。ちっちゃくてかわいかったです。金魚のえさをつぶして、あげてみます」
「ぼくは、稚魚を２匹と卵４個をゲットしました。稚魚はたぶんペアなので、めだおとめだこにしました。でももう少し育たないと、オスかメスかわかりません。早く育ってほしいです」
「教科書の写真と同じで、稚魚のおなかがふくらんでいました。まだえさはいらないので安心です」